



音楽美入門



南部徳洲会病院 赤崎 満

音楽に関しては大きなトラウマがある。

一つは小学校低学年の頃の話。当時、テレビのローカル番組で素人のど自慢をやっていた。某製菓会社の提供で、その社のロゴマークの5つの輪が点数表になっていた。輪がいくつ点灯するかで5段階評価し、すべて点灯すると最高点であった。近所に住んでいた大学生のお兄さんが出演して、自慢の森進一のものまねを披露したが、輪は2つしか点かなかった。本人としてはうまく真似たつもりだが、審査員の評は、もっと自分らしく歌いなさい、だった。ものまね部門ということで応募したのに何でだよ、とくやしがっていた。僕と同年くらいの男の子が童謡を歌って4つ点灯したので、またくやしがっていた。これが事の始まりだった。その番組を見ていた僕の心に何かが点灯したらしく、突然母に、僕も出る、と言い出した。母は出たいとしつこく言う僕に根負けして、テレビ局に電話をかけてくれた。選考会がありますとのことで、指定された日時に、母親と2人ででかけた。同じく出演希望の人達が子供から大人まで10人前後、テレビ局の小さい部屋にいた。その部屋の中で担当者を前にして、一人ずつ持ち歌を歌った。全員歌い終わったあと、本番の日時が告げられ、遅れないようにと注意が出て解散となった。帰り際に、僕ら親子は呼び止められた。3人だけになった部屋で、担当者が母に、お子さんはもう少し大きくなってからの方が良いかと思います、と話しだした。僕ひとり選考で落ちたことがわかった。僕の音楽的才能におそらく気付いていた母は、それを客観的に指摘され、僕以上に落胆したに違いない。帰り道で、他の歌にすればよかったかもね、と無理やり慰

めを言ってくれた。そういう問題ではないことを知りながら。結局、僕は輪ひとつ、もらえなかった。これが、自分の才能に疑問を持った最初の出来事だったように思う。

二つ目の事件は、中学3年の時に起きた。クラス対抗合唱コンクールがあり、それぞれのクラスで、歌の練習が行われた。課題曲はモルダウ。ピアノ伴奏者はすんなり決まったが、問題は指揮者だった。誰もやりたがらず、級長だから、と僕が指名された。誰もやる人がいないからしょうがないか、歌うよりましかも知れないし、と引き受けたまではよかった。最初に指揮の振り方を習った。はい、いち、に、さん・・・これを繰り返すだけだから簡単でしょ、と言って先生はいなくなった。本番まで2回ほど全員で歌合せをした。そしてコンクール当日。校舎をバックに運動場に仮設の舞台が作られ、その上にあがって各クラスが順々に合唱を披露した。他のクラスの指揮者はだいたい何かの楽器をやっている、その音楽的才能を自負しているやつばかりであった。僕らのクラスの番になった。全員勢ぞろいし、その前の指揮台に僕が立った。周りが静かになり、軽い緊張感の中、最初の構えから静かに腕を振り下ろし、合唱が始まった。突然、審査員席の最前列に座っていた音楽の先生が飛び出してきた。あろうことか、後ろから僕の両腕をしっかりとつかまえ、強引に誘導しだした。僕は、カラオケの歌いだしを間違えるようなことを、指揮でやってしまったらしい。先生は数回拍子を合わせてくれたあとで、手を離した。合唱と伴奏が合っていて、指揮だけが合っていないということがあるのか？僕は曲に翻弄され溺れた。発表が終わり疲労感を覚

えながら、次のクラスの合唱をぼんやりと見ていた。指揮者は、エレクトーン演奏で県内一位になったこともあるやつで、すらっと長身で、その繊細に動く指先からは滔々たるモルダウの流れが生み出されていた。豊かな流れよ、モルダウの・・・僕はまた溺れそうになった。

コンクールの順位は忘れた。高校は書道クラスに入った。

思い起こせば、幼稚園や小学校の頃、合奏のときに、僕に渡されるのはカスタネットか、いいとこトライアングルであった。右手の棒でトライアングルをチーンと鳴らしたら、左手の紐をきゅっと握り締めるのよ、いーい、きゅっとよ、としつこく教えられた。

小さなトラウマなら数え切れない。知っている曲を皆で歌っていると、隣の同級生の女の子が、はじめて歌うの？と真面目な顔で訊いてきたこともあった。歌に合わせて手拍子をしていると、いつの間にか自分だけ周りとは拍子がずれているということは、今もよく経験する。カラオケを歌い、先輩からだめだしされたことは何度あったことか。

それでも音楽が好きなのである。高校後半から聞き出したクラシックは特に好きである。その頃には、さすがに、自分には音楽的才能が無いことをはっきり自覚していた。神に愛されたモーツァルトの天賦の才能が、自分には与えら

れなかったことに対して、サリエリが神をうらみ、モーツァルトに嫉妬する気持ちが、僕にはよく分かる。いっしょにされたサリエリは迷惑だろうが、歌は歌えずとも、楽器は弾けずとも、音楽を聴いて美しいと感じることは、僕にもできる。僕が音楽を好きで何が悪い。トラウマを持つ人間はすぐ開き直るんだぞ。

そんな時に出会ったのが、山根銀二著「音楽美入門」(岩波新書)であった。初版は1950年12月。僕の手元にあるのは1976年発行の第38刷版である。35年前、大学1年の時、音楽入門ではなく音楽美入門というタイトルにひかれ、書店で手に取った。少々内容が硬く、著者が伝えたい事の半分も理解できていないのだろうが、音楽を知らない僕に、その素晴らしさを語ってくれた。今では、紙は茶色にくすみ、背表紙も剥がれ落ちて、新書が古書になっているが、僕の大切な本の一つである。

本の紹介をするつもりが、書きだしがよろしくなく過去の告白みたいになってしまった。タイトルと内容にギャップがあるのはそのせいである。

この原稿を読んだ妻は、さもありませんという顔をして、あなたの歌がヘタクソなのはみんなが知っているから大丈夫よ、とのたまった。

小さなトラウマがまたひとつ増えた。

原稿募集！

本の紹介コーナー (1,500字程度)

感動した、生き方が変わった、診療が変わった、新たに真実を知った本等々、会員の皆様の座右の本をご紹介します。